



Year-in-Japan Program 50 周年記念誌

目次

1. 巻頭言

- ・甲南大学 学長 中井伊都子……………3

2. 50年の歩み

- ・創設、創設時のエピソード、年表、歴史……………4
- ・写真で見る歴史（あじさいるーむ）……………8

3. 現在のYIJプログラム

- ・国際交流センター所長 松川 恭子……………9
- ・Resident Director（国際交流センター副所長）Stephen David Luft……………10
- ・2025-2026年 Year-in-Japan Program の概要……………11
- ・さまざまな交流活動……………14

4. 人の物語

- ・同窓生からのメッセージ 在大阪イギリス総領事 Michael Blyth 氏……………19
- ・コンソーシアムからのメッセージ ハワイ大学マノア校 スタディ・アブロード・センター所長 Sarita Rai 氏……………20
- ・現役学生の声（YIJ2025-2026 参加学生）……………21

5. 記念イベント報告

- ・留学生同窓会……………22

6. 資料編

- ・歴代 Resident Director 一覧……………23
- ・歴代国際交流センター所長・副所長一覧……………25
- ・同窓生統計……………27
- ・参考資料……………28

1. 巻頭言

甲南大学 学長

中井 伊都子

Year-in-Japan Program の 50 周年にあたり、この長きにわたる歴史をさまざまな形で連綿と紡いでくださったみなさま方に心から感謝を申し上げます。

甲南-イリノイプログラムとしてスタートして以来、さまざまな変遷を辿りながらも、実に 1,676 人の留学生がこのキャンパスで日本と日本語について学び、その多くがホストファミリーの温かさの中で日本を体感しました。甲南大学生との交流の中から、互いが大いなる気づきと刺激を得て、さらなる学びへと歩を進める姿に接することはこの上ない喜びです。そして、これらすべてのことは、ホストファミリーの方々、歴代の Resident Director の先生方、国際交流センターの所長はじめ教職員のみなさま方、そして日本語やジャパニスタディーズ科目を担当してくださった先生方のひとかたならぬご尽力の賜物です。



この間には、2020 年初めごろからの世界的な新型コロナウイルスの蔓延という国際交流にとって致命的な事態が生まれました。留学生を受け入れることも送り出すこともできない危機的な状況ではありましたが、これを乗り越えたことで甲南大学と海外協定校との結びつきはより深いものへと進化しました。国際情勢はなお不安定で、学生の往来を手放して応援できる環境ではないのが辛いところですが、この Year-in-Japan Program で一人でも多くの留学生が甲南大学の人物教育の中で学び、本学の学生との交流を通じて互いに高め合い、将来的にはそれぞれの国と日本をつなぐ架け橋として活躍されることを心から願っています。

次の 50 年も、このプログラムの発展を通して国際交流の輪が廻り続け、多文化共修が実現した融合型グローバルキャンパスがますます発展しますように！

2. 50年の歩み

創設

Year-in-Japan Program (以下、「YIJ」) は、1976 年に「甲南—イリノイプログラム」として誕生した。本プログラムは、イリノイ大学を中心とする米国中西部の州立大学に所属する大学生が、日本での生活と文化を“生きた姿のまま”理解することを旨とし構築されたものである。

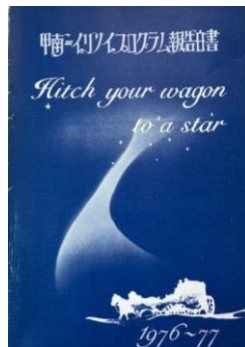
初期の目的は、日本での直接生活体験を通じて文化・社会の理解を深めると同時に、甲南大学での活動参加を通じて日米大学間の総合的な教育・学術交流を促進する点にあった。

プログラムの核となった内容は以下の五つである。

- 1) 甲南大学キャンパス内、甲南イリノイセンターに於ける通年の講座開設
- 2) 参加学生たちによる野外調査旅行ならびに、その学生各位の個人別自主研究の指導監督
- 3) 全期間（9ヵ月半）を通じての日本人一般家庭内での共同生活
- 4) 甲南大学でのクラブ、サークル活動等への参加
- 5) イリノイ大学、甲南大学教授間の学術交流並びに「交換」講義担当

当時としては極めて革新的で、単なる語学留学ではなく「生活・文化・学術の三位一体」を志向した総合教育であった点が、YIJ を際立たせている。こうした理念は、この後 50 年の発展を通じて絶えず受け継がれ、YIJ は甲南大学における国際教育の中核として定着していくこととなる。

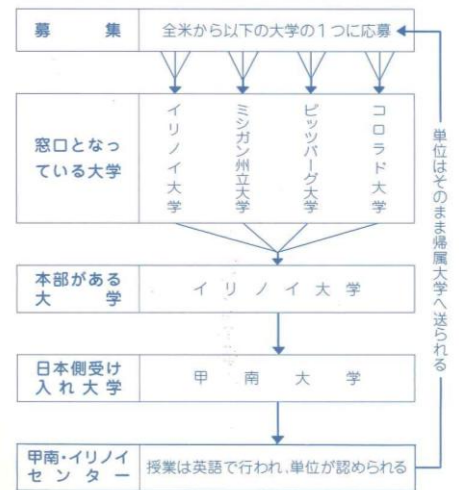
「甲南—イリノイプログラム報告白書 1976~77」



創設時のエピソード

YIJ の源流は、1972 年にイリノイ大学の文化人類学者デイヴィッド・W・プラス教授 (David W. Plath) を甲南大学が文学部客員教授として迎えたことに遡る。教授は滞在中、日本文化を現地の生活を通して学ぶ実践的な教育の可能性を強く感じ、「日本での生活を通じて学ぶ」プログラムを甲南大学で実施したいという構想を抱いたことが始まりであった。1973 年に同教授は帰国したが、この構想は京都大学助教授 (元甲南大学助教授) の米山俊直へ、さらに本学文学部の増田光吉教授へと伝えられ、非公式ながら学長鈴木正治へも伝達され検討が進んだ。1974 年にはイリノイ大学アジア研究所のプラス教授とピアソン教授 (John D. Pierson) が来学し、増田光吉教授、学長補佐の西川喜良教授、文学部のロルフ・ビンケンスタイン教授らとともに鈴木学長と面談し、このプログラムに関する正式な申し入れが行われた。この提案を受け、甲南大学では同年 4 月に検討委員会、7 月には具体案の作成を担う小委員会が設置され、受入体制の整備が急速に進んだ。翌 1975 年には受入準備委員会が正式に発足し、制度設計と運営準備が本格化した。同年

■ イヤー・イン・ジャパン・プログラム (Year in Japan Program)



1983.12.1 発行「甲南・イリノイセンター
YEAR IN JAPAN PROGRAM」パンフレットより

2 月には衣笠茂新学長が就任するも、プログラム実施の方針は継承され、教授会での審議を経て学内の了承が得られた。1975 年の学生受入れはイリノイ大学側の応募状況により見送られたものの、準備は中断されることなく進められ、翌年の実施へ向けて着実に体制が整えられた。そして 1976 年 3 月 30 日、甲南大学とイリノイ大学との間で協定書が正式に調印される歴史的瞬間を迎えた。調印式にはイリノイ大学からブリニガー教授（George K. Brinegar, Campus Director of International Program and Studies）、ジンマーマン教授（Vernon K. Zimmerman, Dean of the College of Commerce and Business Administration）、ピアソン教授の 3 教授が出席し、国際教育における新たな協働体制がここに確立された。同年 9 月には待望の第 1 期生 21 名が来日し、甲南大学での講義、野外調査、自主研究、ホームステイ、クラブ・サークル活動を含む多面的な学びが実際にスタートした。こうして Yij の歴史は幕を開け、学生の国際交流を求める強い期待、そして多くの教職員や地域住民の惜しみない協力に支えられながら、今日につながる 50 年の歩みが始まったのである。

年表

西暦	出来事
1976 年	協定書の正式調印（3 月 30 日）、第 1 期生の受入（9 月）
1984 年	新 10 号館竣工とともに甲南イリノイセンターが 10 号館南棟 2 階に設置
1989 年	「イリノイ大学と甲南大学との学生交流プログラム」にかかる新しい協定書の調印 Resident Director(甲南—イリノイプログラム所長)を客員教授として迎える。 ハワイ大学がイリノイコンソーシアムに加盟
1990 年	本学園に国際交流センターを設置（10 号館 2 階）。イリノイコンソーシアムの管理・運営から、甲南学園の管理・運営に変わる。
1992 年	イギリスのリーズ大学、オーストラリアのマードック大学と協定締結
1993 年	アメリカのニューヨーク州立大学バッファロー校、カナダのビクトリア大学と協定締結 カナダからの留学生で経営学を専攻している学生を対象に企業研修を提供
1995 年	受入れしたものの阪神淡路大震災のため中止
1997 年	国際交流センターが新 3 号館 2 階に移転。 カナダのカールトン大学と協定締結
1998 年	国際交流センターを大学に移管。甲南—イリノイプログラム所長が国際交流センター副所長となる。
1999 年	ニュージーランドのワイカト大学と協定締結
2000 年	甲南—イリノイプログラム 25 周年記念事業の実施 フランスのトゥール大学、ドイツのライプツィヒ大学との協定締結
2003 年	フランスのリヨン第 3 大学と協定締結
2005 年	ドイツのベルリン・フンボルト大学との交換留学制度が開始
2011 年	東日本大震災の発生により一部の途中帰国学生の対応をするも、プログラムは続行
2015 年	グローバルゾーン Porte が開設、国際交流センターが 2 号館 1 階に移転
2020 年	新型コロナウイルス感染症拡大、Yij の受入中止
2022 年	Yij（ノンコンソーシアム校）受入再開（3 月） Yij に関する協定書をハワイ大学と締結。 コンソーシアムの窓口校がイリノイ大学からハワイ大学になる。 Yij（コンソーシアム校）受入再開（9 月）
2025 年	留学生同窓会の実施

歴史

1970年代：生活世界を学びに変えた創設期

1976年9月に発足した「甲南—イリノイプログラム」は、単なる留学制度ではなく、日本での生活そのものを学びに転換する先駆的な試みとして立ち上がった。学生たちは日本社会の実際の暮らしの中に身を置き、日常の体験を足場にしながら文化・社会構造への理解を深めることを重視した。インディペンデント・スタディでは各自が関心に基づくテーマを設定し、必要に応じて学外研究者の指導も受けながら、学術的探究を着実に進めていった。特別講義（レクチャ・シリーズ）やゼミ参加といった学内での学びに加えて、自治会国際交流委員会の協力やホストファミリーの受入れなど、学生の学習環境は教室の外へ大きく広がり、生活・学術・交流が相互補完的に循環する教育モデルが早くもこの時期に形成されていた。



甲南・イリノイセンター

1980年代：拠点整備と定着

1980年代に入ると、プログラムは学内の重要な国際教育プログラムとして着実に根付き、受入・運営体制の安定化が課題となった。旧10号館の解体に伴い1982年から翌年までの間は一時的に2号館3階を拠点とする仮住まいが続いたが、この期間もプログラムは中断することなく継続された。新10号館の完成とともに、甲南イリノイセンターは南棟2階へ移り、より充実した施設環境のもとで教育活動が再開された。この移転は物理的な拠点整備にとどまらず、今後の発展を支える象徴的な局面となり、Yijが学内に確固たる存在感を持つ段階へ移行したことを示す節目となった。一方で、この頃には円高の影響がプログラム運営にも及び、1987年にはイリノイ大学との協議を経て補助金の拠出が決定されるなど、財政的課題への対応が進められた。その後も両大学の相互訪問を通じて補助金・奨学金は増額され、Resident Director（甲南—イリノイプログラム所長）を本学規程に基づく客員教授として遇することなど、運営体制の強化が合意された。これらの協議内容は協定書の修正として整理され、1989年に新たな協定が調印されるなど、プログラムの継続と発展を支える枠組みが整えられていった。

1990年代：制度化と拡張

1990年11月1日、国際交流センターが甲南学園に設置され、従来イリノイコンソーシアムが担っていた管理・運営が甲南学園へと移行した。これを機に英語圏を中心に協定校の拡大（イギリスのリーズ大学、オーストラリアのマードック大学、アメリカのニューヨーク州立大学バッファロー校、カナダのビクトリア大学、カールトン大学）が進み、9ヶ月間の受け入れ体制のもと留学生は週10時間程度の日本語、英語で行われるジャパNSTADIEZを履修し、日本語習熟度に応じて本学の広城副専攻科目や専門科目の履修も可能となった。翌1991年2月には、センターの所管が甲南大学へ移り、教学として国際交流を推進する体制が整備された。新規程では副所長の一人を甲南—イリノイプログラム所長と定め、コンソーシアム外の学生にとってもYear-in-Japanを統括する責任者が明確となった。また、学部代表教員を含む運営体制が整えられ、学部との連携が制度的に強化された。加えて、全員ホームステイの実施や1993年度開始の企業研修（主にカナダの経営学専攻者対象、1-3月、関西の企業で実施）の導入により、Yijの実践的学びはさらに充実した。

2000年代：節目の25周年と欧州連携

2000年にはプログラムの25周年記念事業が行われ、イリノイ大学の関係者が多数来学し、節目を祝うとともに、プログラムの将来像を議論する機会が設けられた。この時期から、協定校は英語圏のみならずヨーロッパへも広がり、フランス（トゥール大学、リヨン第3大学）、ドイツ（ベルリン・フンボルト大学）などとの交換留学制度が相次いで開始された。多様な文化背景を持つ学生が甲南大学に集うようになり、Yijは国際教育プログラムとしての多文化的広がりや厚みを持ち始めた。



甲南—イリノイプログラム25周年記念ロナルド・トビ博士講演会

2010年代：学内国際共修の深化

2015年9月には、グローバル教育推進の拠点としてグローバルゾーン「Porte」が開設された。Yij留学生は英語のみで交流するLanguage LOFTのLOFT Tutorとして出身国の話をしたり、甲南生の英語の学習を支援したりすることで、甲南生との交流を深める機会が増大した。また、Language LOFTでの英語でのコミュニケーションが円滑に行われるよう、留学経験や外国語能力の高い甲南生が、LOFT Assistantとして活躍し、学修支援が日常的に行われるようになった。授業と自律学習が連動し、留学生と日本人学生が主体的に関与し合う“国際共修”の文化が急速に深化したのがこの時期の大きな特徴である。



グローバルゾーン「Porte」

2020年代：二重の困難の克服と再始動

2020年には新型コロナウイルス感染症の拡大により国境が封鎖され、Yijの受入れは中止を余儀なくされた。さらに、1976年の協定締結以来連携を続けてきたイリノイ大学から、協定の契約が満了する2022年6月末をもってコンソーシアムの継続が困難である旨が伝えられ、体制上の大きな転機にも直面した。こうした二重の困難を受けて、ハワイ大学が窓口校の引継ぎを申し出たことにより、プログラムの未来が新たに開かれることとなった。2022年5月に本学はハワイ大学と新たに協定を締結、同年にはYij留学生の受入れを再開した。中断から再始動へと至るこの過程においても、日常の経験を起点に文化への理解を深め、その気づきを学術的探究へと結びつけていくYijの学びの姿勢は揺らぐことなく受け継がれている。

写真で見る歴史（あじさい一む）

第10号館の「三階半」、その一番奥の部屋（元・英文科第2研究室）が“あじさい一む”である。甲南イリノイセンターの米人学生達の講義室・自習室・図書館・会議室及び「だべりんぐ」用のロビーと、その機能は、あたかもリンカーンの生家の居間の如しである。この部屋は、決して米人学生達だけのものではない。国際交流委員会諸氏との「日米会談」の場でもあり、また、麻ま色の髪の〇〇嬢と甲南男児△△君とのデートの待合せの場ともなりつつある。ちなみに、“あじさい一む”の名の由来は、神戸市の花が「あじさい」であることを知ったことに帰する。米人学生達が、その花のように一団となって「群生」する部屋、そして「淡い紫色」の素晴らしい思い出の花を咲かしてくれるようにとの期待をこめて、初代所長プラス先生が命名した次第であった。（「甲南＝イリノイプログラム報告白書 1976～77」より抜粋）



1976年当時



2001年当時



あじさい一むの変遷と現在

あじさい一むは、1970年代の甲南・イリノイセンター以来、10号館、3号館と拠点を移しながらYij留学生の学びと交流を支えてきた空間である。その後、2015年9月のグローバルゾーン「Porte」開設に伴って2号館1階へ移設され、現在の形へと受け継がれている。3号館2階にあった頃は、位置の関係もあり利用する学生が限られがちであったが、移設後はテラスに面した開放的な空間となり、外部からも気軽に立ち寄れるようになった。現在のグローバルゾーンは、留学生が集う「あじさい一む」、英語での交流を行う「KONAN Language LOFT」、さらに多言語で学び合う「グローバルラーニング commons」の3エリアで構成されている。こうした環境整備により、あじさい一むはこれまで以上にYij留学生と甲南生が自然に交わり、多文化的な学びが日常的に生まれる場として、その役割をいっそう強めている。



2025年現在

3. 現在の YiJ プログラム

国際交流センター所長

松川 恭子（甲南大学文学部社会学科教授）

Year-in-Japan (YiJ) プログラムは、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の David W. Prath 教授が 1972 年に客員教授として甲南大学で過ごす中で着想されました。その後、文学部の増田光吉教授と協議を重ね、1976 年 9 月に甲南—イリノイプログラムが始まりました。

1977 年 5 月刊行の第 1 回プログラム記念文集『あじさい』への寄稿において、Plath 教授は、学生たちが既存の大学キャンパスを飛び出して「現地／現場

(Field) 」で学ぶことの大切さを説いています。それは、文化人類学者である自身の経験から来る実感だったのではないのでしょうか。日本での実際の生活を通じて、学生た

ちは自身の固定観念を打ち破り、広い世界を知ることができる。そして、日本にやって来た留学生たちとの交流を通じて、甲南大学の学生たちにも世界への扉が開かれる。第 1 回プログラムの留学生が来てから 50 年経った現在、Global Zone Porte では YiJ 留学生たちと甲南生の活発な交流が行われています。Plath 教授が願った学びの姿がそこにあります。

本プログラムは、様々な困難を乗り越え、現在に至ります。阪神淡路大震災が発生した 1995 年度、新型コロナウイルス感染症が拡大した 2020 年度、2021 年度のプログラムは、残念ながら中止となりました。また、2011 年の東日本大震災発生時には、プログラムは続行されたものの多くの留学生が途中で帰国しました。さらに、2022 年 6 月にイリノイ大学との協定が終了し、ハワイ大学マノア校に窓口が移管されるにあたり、プログラム運営のあり方を再度検討するために何度も協議を重ねる必要がありました。

2021 年 4 月に、私は所長となりましたが、早々にその年のプログラムの受入れ中止が決定されました。誰もいない Global Zone を眺めながら、この先プログラムを本当に再開することができるのか、不安に思ったことを覚えています。その後、翌年の受け入れ再開とハワイ大学との協定締結に向けて、ハワイ大学マノア校スタディ・アブロード・センター所長である Sarita Rai 氏と毎月のようにオンラインでミーティングを重ね、2022 年 9 月にプログラムを再開することができ、現在に至ります。プログラムを継続することができたのは、国際交流センターの業務に携わる教職員の皆さん、日本語科目・ジャパNSTUDIES 科目を担当する先生方、ホストファミリーの方々、プログラム運営のパートナーであるハワイ大学マノア校を窓口校とするコンソーシアムの皆さんの熱意とご尽力のお陰です。

今後も本プログラムが末永く続いていくことを祈念いたします。



Resident Director 2025-2026 (国際交流センター副所長)

Stephen David Luft (University of Pittsburgh, Department of East Asian Languages & Literatures)

The Year in Japan program began in 1976 when Professor Kokichi Masuda of Konan University and Professor David Plath of the University of Illinois at Urbana-Champaign initiated the “Konan Illinois” exchange program. Since its humble beginnings, what has since become known as the Year in Japan program has grown to welcome students from over 15 different universities and 5 different countries. Now, thanks to the dedication and commitment of countless individuals, including teachers, staff members, host families, and many others, the Year in Japan program has been providing life-changing study abroad experiences in Kobe for over 50 years.



I am currently serving as Resident Director of the Year in Japan program for the second time, my first time being 10 years ago when the program celebrated its 40th Anniversary and the Global Zone was opened at Konan University. My first experience living in Japan was as a missionary. That experience of living in Japan and learning the Japanese language and culture changed my life. As a result, I gained skills, work, and friendships that never would have been possible otherwise. It is an honor to be able to now serve once again as Resident Director of the Year in Japan program and help students to have the same kind of experience living and learning in Japan that I did many years ago.

Over the past 50 years, the Year in Japan program has continued to thrive in spite of natural disasters, tensions between nations, a global pandemic, and other difficulties, providing students with experiences and skills that not only improve their education but change their lives. The continued success of this program throughout the past 50 years suggests a bright outlook for the future. I look forward to many more years in which students from across the globe can to gather at Konan University, learn a new language and culture, make friends, and participate in the type of experience that only study abroad can provide.

2025-2026 年 Year-in-Japan Program の概要

学年暦	9月初旬～翌年5月末（秋学期：9月～12月、春学期：1月～5月）
留学期間	通年での留学（9月～翌年5月）、秋学期（9月～12月）のみ、 春学期（1月～5月）のみ
授業	（午前）日本語（月曜日～金曜日、50分授業×2～3回） （午後）ジャパスタディーズ（英語による日本の文化等）3単位 最低2科目履修、ジョイントセミナー（甲南生との交流授業）
行事	10月 高野山日本語研修旅行 3月広島・宮島日本語研修旅行
滞在方法	主にホームステイ（大学から通学時間が約45分以内） もしくは学外の学生寮・会館

YIJに参加する海外協定校

コンソーシアム校とノンコンソーシアム校から、留学生の受入を行っている。

○コンソーシアム校

アリゾナ大学、イリノイ大学、ハワイ大学、ピッツバーグ大学の4校がコンソーシアムを構成し、ハワイ大学を窓口校として、学生の受け入れを行っている。

○ノンコンソーシアム校

本学と交換協定を締結して、甲南から先方に学生を派遣する代わりに、本学で先方からの学生の受け入れを行っている。

（米国）ニューヨーク州立大学バッファロー校、ウィーバー州立大学、フォートルイスカレッジ

（カナダ）ビクトリア大学、カールトン大学、ケベック大学モントリオール校

（イギリス）リーズ大学

（オーストラリア）マードック大学、イーデスコワン大学

（ドイツ）ライプツィヒ大学

（フランス）トゥール大学、リヨン第三大学

プログラムスケジュール

Fall Semester 2025	
Arrival	Sep. 3
Orientation	Sep. 4 – Sep.10
Progress Check Meeting 1	Oct. 24
Study Tour 1 （高野山）	Nov. 6 – 7
Farewell Event for Fall Semester Students	Dec. 15
Last Day of Fall Semester	Dec. 19
Return date for Fall Semester Students	During Dec.20-31
Winter Break for Full Academic Year Students	Dec. 20 – Jan. 13

Spring Semester 2026	
Arrival for New Intake	Jan. 7
Orientation for Spring Semester Only students	Jan. 8 – Jan.13
First Day of Classes	Jan. 14
Progress Check Meeting 2	Feb. 27
Study Tour 2 （広島・宮島）	Mar. 5 – 6
Spring Break	May 4 – May. 6
Last Day of Spring Semester	May 14
Farewell Event	May 15

日本語科目

YIJプログラムでは、「聞く・読む・話す（会話）・話す（発表）・書く」という5つの言語技能を重視しており、各学生に最も適した履修レベルをブレースメントテストによって判定している。本プログラムにおける各レベルの学習目標は、以下のように定められている。

Japanese 1: Students will be able to understand and use fundamental phrases and expressions that are regularly used in daily life in Japan.

Japanese 2: Students will be able to understand and exchange information with others using basic personal information and other high frequency patterns and expressions.

Japanese 3: Students will be able to understand and converse with friends and others on topics they are familiar with using standard Japanese.

Japanese 4: Students will be able to understand and confidently express complex ideas on both concrete and abstract topics.

Japanese 5: Students will be able to understand and discuss content related to social, academic, and professional topics. In discussing these topics, they will be able to express themselves in ways that are sensitive to those they speak with.

ジャパNSTADIEZ科目（2025-2026 年秋学期）

Course	Theme	Instructor	Credit
JS 1	Aspects of the Japanese Language	LUFT, Stephen David	3
JS 5	Introduction to Japanese History	TSU, Timothy Yun Hui	3
JS 8	Contemporary Economy and Business in Japan	SHRESTHA, Manoj, L	3
JS 10	Japanese Society from a Cross-Cultural Perspective	TAMAS, Carmen	3
JS 13	Japan 360° (Joint Seminar)	SRINIVAS, Hari	2

ジャパNSTADIEZ科目（2025-2026 年春学期）

Course	Theme	Instructor	Credit
JS 2	Pragmatics of Japanese	LUFT, Stephen David	3
JS 3	Storytelling and Witness in Modern Japanese Literature	SHIGETO, Yukiko	3
JS 6	Contemporary Japanese Society from a Ritual Perspective	TAMAS, Carmen	3
JS 9	Introduction to Japanese food Culture	TSU, Timothy Yun Hui	3
JS 11	Environmental Policies and Issues of Japan	SRINIVAS, Hari	3
JS 14	Glocal Leadership (Joint Seminar)	ISHIKAWA, Ryuji	2

タイムテーブル（2025-2026 年秋学期）

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
9:00 - 9:50	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese
10:00 - 10:50	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese
11:00 - 11:50	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese	-
13:00 - 14:30	JS5	JS1	JS5	JS1	JS8
14:40 - 16:10		JS10	JS13		JS8
16:20 - 17:50		JS10			

- * JS13 is a Joint Seminar which is shared with Konan students.
- * Each classroom for Japan Studies is subject to change according to the number of students, but will be finalized and officially announced by September 29. Until then, please check the white board in front of GZ.

タイムテーブル（2025-2026 年春学期）

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
9:00 - 9:50	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese
10:00 - 10:50	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese	Japanese
11:00 - 11:50	Japanese	Japanese	-	Japanese	-
13:00 - 14:30	JS9	JS14	JS11	JS9	JS3
14:40 - 16:10	JS3	JS6	JS14	JS2	JS11
16:20 - 17:50	JS2	JS6			

- * JS14 is Joint Seminar and will be held only in February and March.



さまざまな交流活動

Yij プログラムでは、授業内外を問わず多様な交流活動を展開しており、留学生と甲南生が互いに学び合い、多文化理解を深める場が数多く設けられている。言語学習支援や共同授業、課外活動、国際交流イベントに加え、グローバルゾーンでの英語アクティビティや中高生との連携企画など、学内外に広がる交流の機会が特徴である。以下に、その主な取り組みを紹介する。

● 甲南生との交流

授業内での交流（ジョイントセミナー）、まなとも（日本語の授業内でのランゲージパートナー）、課外活動、tomodachi プログラム、ランゲージパートナー、各種交流イベント等

● グローバルゾーンの Language LOFT で行っている英語アクティビティに LOFT チューター活動

● LOFT English Camp での LOFT アシスタント（甲南生）と LOFT チューター（Yij 留学生）の交流

● Study Abroad Fair の実施（Yij 留学生による所属大学の紹介）

● 日本語授業において、日本語教授法実習 I（国内実習クラス）履修者の教壇実習の受入れ

● 中高大 10 年一貫教育

インターカルチャーデイの実施@甲南中高

LOFT 特別アクティビティの実施@岡本キャンパス

甲南生との交流プログラムの実施

- Tomodachi プログラム（来日前からメールで連絡。来日後、キャンパスツアーや岡本ツアーの実施。）
- クラブパフォーマンス（甲南生の部活紹介）
- ランゲージパートナー（お互いの言語で交流）
- ウェルカムパーティー（来日後の交流イベント）
- 季節イベント（ハロウィン、クリスマス、ひな祭り、文化体験など）

2025年度 国際交流イベント年間カレンダー

実施月	実施時期	イベント名	イベント内容	対象留学生	申込期間	サーティフィケートポイント	
4月	17日(木)	ウェルカムパーティー	留学生とランチ交流。留学生に自分の大学のことや勉強生活などについて紹介してもらう。	全	4月上旬	HOP(A) 5点	
	14日(月)～18日(金)	International week ～LOFT Tour～	留学生主体でLOFTアクティビティを実施する。	全	申し込み不要	通常のLOFTアクティビティと同様	
5月	上旬	ランゲージパートナー	留学生と甲南生がお互いに言語を教え合う。	全	4月中旬～下旬	HOP(A) 15点	
6月	上旬	Tomodachiプログラム	来日前に留学生とメールを交換し、来日後にキャンパスや岡本周辺を案内する。	全	4月下旬	HOP(A) 15点	
	中旬	ウェルカムパーティー	留学生とランチを食べながら自由に交流。	全	5月下旬～6月上旬	HOP(A) 5点	
7月	中旬	夏祭りイベント	グローバルゾーンでヨーロッパの輪投げなど様々なゲームを実施。	全	申し込み不要	ポイント対象外	
9月	Year-in-Japanプログラム参加留学生来日(欧米圏からの留学生)【滞在期間:9月上旬～5月下旬(9ヶ月) ※一部の学生は9月～12月(4ヶ月)】						
	一般交換留学生来日(アジア圏からの留学生)【滞在期間:9月下旬～2月下旬(5ヶ月)/夏年8月下旬(10ヶ月)】						
	上旬	Tomodachiプログラム	来日前に留学生とメールを交換し、来日後にキャンパスや岡本周辺を案内する。	全	7月上旬	HOP(A) 15点	
		クラブパフォーマンス(Tomodachiプログラム)	Tomodachiプログラム参加留学生と甲南生に向けてクラブパフォーマンスの紹介を行う。	全			
		まなともプログラム	甲南生が留学生の授業に参加し、勉強をサポート。	全	7月中旬	授業に1回参加→HOP(A)5点	
ジャンプスタディーズ13(～12月下旬)		留学生の授業(ジャンプスタディーズ)を履修し、留学生と交流。	全	7月1日～7月14日	STEP(B) 15点		
中旬	あじ友プログラム	来日前に留学生とメールを交換し、来日後にキャンパスや岡本周辺を案内する。	全	7月上旬	HOP(A) 15点		
10月	上旬	International week	留学生と経験を通して交流、留学生や帰国学生に協定校のことや勉強していることなどを紹介してもらう。	全	9月中旬	HOP(A) 5点	
下旬	ハロウィンイベント	留学生と経験やゲームを通して自由に交流。	全	申し込み不要	ポイント対象外		
11月	中旬	ランゲージパートナー	留学生と甲南生がお互いに言語を教え合う。	全	10月下旬	HOP(A) 15点	
12月	中旬	クリスマスイベント	留学生と経験やゲームを通して自由に交流。	全	申し込み不要	ポイント対象外	
1月	Year-in-Japanプログラム参加留学生来日(欧米圏からの留学生)【滞在期間:1月上旬～8月下旬(8ヶ月)】						
	中旬	Tomodachiプログラム	来日前に留学生とメールを交換し、来日後にキャンパスや岡本周辺を案内する。	全	11月中旬	HOP(A) 15点	
ウェルカムパーティー		留学生とランチを食べながら自由に交流。	全	12月中旬	HOP(A) 5点		
2月	上旬	ジャンプスタディーズ14(～3月下旬)	留学生の授業(ジャンプスタディーズ)を履修し、留学生と交流。	全	12月1日～12月15日	STEP(B) 15点	
	下旬	ランゲージパートナー	留学生と甲南生がお互いに言語を教え合う。	全	2月中旬	HOP(A) 15点	
3月	上旬	ひな祭りイベント	詳細未定	全	未定	ポイント対象外	
	下旬	あじ友プログラム	来日前に留学生とメールを交換し、来日後にキャンパスや岡本周辺を案内する。	全	12月上旬	HOP(A) 15点	

留学生の内訳: ⓧ Year-in-Japan (Yij) プログラム参加留学生 ⓧ 一般交換留学生 ⓧ 夏期日本語集中講座参加留学生



LOFT チューターとしての YIJ 留学生の活動

● LOFT チューターの人数* (2022 年以降の人数)

2022 年 19 名
 2023 年 17 名
 2024 年 12 名
 2025 年 18 名

● LOFT チューターが実施する Event のタイトル (一例)

Simple Methods to Use English Everyday

“An Oregon Road Trip”

ゲームを通して英語を学ぶ

English Movies

Animals of the Pacific North West

Where do science terms come from?

Languages in America

Methods for killing boredom

About Philadelphia

Foods Around the World

Western Memes and Culture

Manga and Illustration

Discover Morocco



LOFT チューター



授業内での YIJ 留学生と甲南生との交流

● ジャパンスタディーズ科目 (ジョイントセミナー)

留学生科目であるジャパンスタディーズ科目を甲南生が履修できる。(英語での授業)

また、その科目において留学生と甲南生が一緒に授業を受けるジョイントセミナーを開講。

● まなともプログラム (日本語授業内でのサポート)

日本語の授業内でボランティアとして YIJ 留学生と交流

2025 Japan studies

留学を考えている方、将来グローバルに活躍したい方、
英語力を磨きたい方集まれ!

ジャパンスタディーズって何?
甲南大学の学生が、留学生とともに日本の社会・歴史・芸術や国際的な知識などを英語で学ぶ科目です。本科目は留学生・甲南生ともに毎年大人気! 英語力を高めながら、国際感覚や多様性への理解も深めることができます。
春休みを有効活用して、留学生と一緒に授業で英語力を伸ばし、国際的な知識を深めましょう!

【開講期間】2026年2月~3月
 【履修登録】国際交流センターを通してのみ可能です。
 (My Konanでの履修登録はできません。)

科目: ジャパンスタディーズ14
 担当教員: 石川 隆士先生
 テーマ: Glocal Leadership
 曜日・時間: 火曜3限・水曜4限
※2月授業単日は20・20A・20B・20Cのみとなります。
 初回授業日: 2026年2月3日(火)
 配当年次: 1 単位数: 2

15点
取得

留学生の日本語授業のボランティア

まなとも 募集

活動期間: 2025.10.1 (水) - 2026.4.24 (金)

2025年9月、甲南大学にアメリカ、ハワイ、カナダなどの協定校から34名の留学生がやってきます!
日本語の授業に参加して、留学生と交流してみませんか。
日本語のボランティアに興味のある方、ぜひ参加してください!

活動内容

留学生の日本語の授業に参加し、日本語学習のサポートを行います。
・日本語の会話練習
・プレゼンの練習
・授業について話し合い(中上級)
・日本の文化について説明(初級)

グローバルサーティフィケート対象

グローバルサーティフィケート対象
日本語履修1回単位以上の履修
かつ、ジャパンスタディーズの履修について、国際交流センター事務局(留学センター)に申請(まだ開校していません)

活動曜日・時間

月~木曜日 午前10:00~10:50
(9月開校) 午前11:00~11:50

※日本語の授業担当からの専事に合わせて実施
※時間があるときに参加、月曜にスケジュールを伝えます。(報告はありません)

説明会申し込み

右下のQRコードから申し込みしてください。
説明会は下記の日程のいずれかで30分ほど予定しております。

7月14日(月)
7月15日(火)
7月16日(水)

【お問い合わせ】 事務局(国際交流センター-YIJ日本語プログラム担当)



募集科目 (開講時期 2025年9月~12月)

科目	担当教員	曜日・時間	初回授業予定日
ジャパンスタディーズ 1 Aspects of the Japanese Language	LUFT, Stephen	火曜 3限 木曜 3限	9月16日(火)
ジャパンスタディーズ 5 Introduction to Japanese History	TSU, Timothy Yun Hui	月曜 3限 水曜 3限	9月17日(水)
ジャパンスタディーズ 8 Contemporary Economy and Business in Japan	SHRESTHA, Manoj L	金曜 3限 4限	9月19日(金)
ジャパンスタディーズ 10 Japanese Society from a Cross-Cultural Perspective	TAMAS, Carmen	火曜 4限 5限	9月16日(火)
★ジャパンスタディーズ 13 (Joint Seminar) Japan 360°	SRINIVAS, Hari	水曜 4限	9月17日(水)

近年の課外活動への参加実績

- 弓道部 (YIJ 2025-26)
- 茶華道料理部道心会 (YIJ 2022-23)
- 柔道部 (YIJ 2024-25)
- 卓球部 (YIJ 2023-24)
- 陶芸部 (YIJ 2022-23、YIJ 2023-24、YIJ 2024-25)
- バレーボール部 (YIJ 2025-26)
- ライフル射撃部 (YIJ 2025-26)
- ラグビーフットボール部 (YIJ 2024-25、YIJ 2025-26)
- 和太鼓同好会 (YJ 2025-26)
- 摂津祭実行委員会 (YIJ 2024-25)

1976年初年度のクラブ活動の様子



ラグビーフットボール部 (YIJ 2025-26)



練習にうちこむ、プログラム学生 (合気道部)



弓道部 (YIJ 2025-26)



バレーボール部 (YIJ 2025-26)

STUDY ABROAD FAIR の実施

グローバル教養学環（STAGE）の学生とYIJ 留学生とのコラボ企画。

各ブースに分かれて、YIJ 留学生が所属する大学のプレゼンを日本語で行い、STAGE 生と交流。



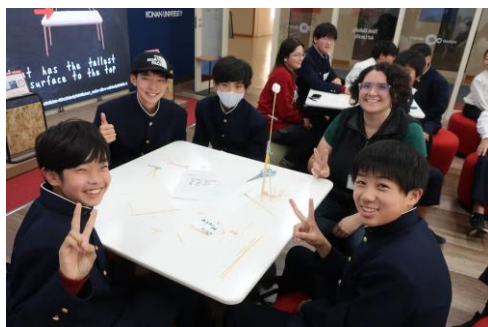
甲南中高生との交流

- インターカルチャーデイの実施@甲南中高

(YIJ 留学生が所属する大学プレゼンを英語で行い、中高生と交流)

- LOFT 特別アクティビティの実施@岡本キャンパス

(YIJ 留学生が LOFT チューターとして中高生が LOFT アクティビティを体験)



地域との交流

1976年プログラム開始当初から近隣の方にホームステイをお願いし、地域住民との交流につながっている。

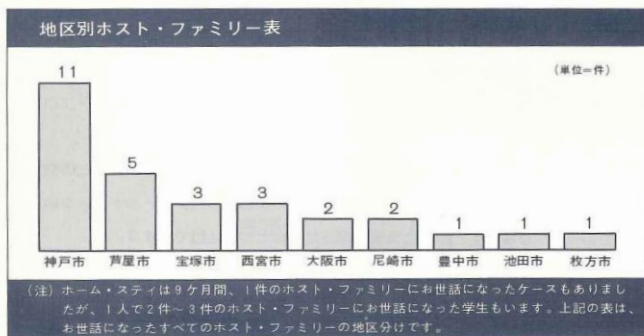


有村家でのお正月 モーリン・ハーレビー

外国人 わが家に留学生がやってきた!
「涙と笑いのホームステイ」

KONAN TODAY
2025年57号

1976年初年度のホストファミリーの所在地



キッズフェスティバルにおける「留学生と英語で遊ぼう」での交流（地域の子供との交流）

YIJ 留学生がキッズフェスティバルのプログラムの一つとして「留学生と英語で遊ぼう」のコーナーを毎年運営し、近隣の子供との交流

神戸商業高校の生徒による神戸案内（地域の高校生との交流）

来日時のオリエンテーションの一環として、神戸商業高校の生徒がYIJ 留学生に神戸の観光地を案内するフィールドワークを実施。「神戸の魅力を発信する」をテーマに、北野異人館、南京町、生田神社、メリケンパークの4つのグループに分かれそれぞれの場所の歴史や魅力を案内。



キッズフェスティバル 2025年12月14日
10:00-15:30 (開催9:45)
甲南大学 西キャンパス

Kids festival 2025
甲南大学 学生大使がナビゲート

イベントMAP
Common 中央会館
1号館
2号館
3号館
4号館
5号館
6号館
7号館
8号館
9号館
10号館
11号館
12号館
13号館
14号館
15号館
16号館
17号館
18号館
19号館
20号館
21号館
22号館
23号館
24号館
25号館
26号館
27号館
28号館
29号館
30号館
31号館
32号館
33号館
34号館
35号館
36号館
37号館
38号館
39号館
40号館
41号館
42号館
43号館
44号館
45号館
46号館
47号館
48号館
49号館
50号館
51号館
52号館
53号館
54号館
55号館
56号館
57号館
58号館
59号館
60号館
61号館
62号館
63号館
64号館
65号館
66号館
67号館
68号館
69号館
70号館
71号館
72号館
73号館
74号館
75号館
76号館
77号館
78号館
79号館
80号館
81号館
82号館
83号館
84号館
85号館
86号館
87号館
88号館
89号館
90号館
91号館
92号館
93号館
94号館
95号館
96号館
97号館
98号館
99号館
100号館

電子版マップはこちら
QRコード

甲南大学
KONAN UNIVERSITY

4. 人の物語

同窓生からのメッセージ

在大阪イギリス総領事 Michael Blyth 氏

Dear Konan University Year in Japan (YiJ) Programme,

Congratulations on your 50th anniversary. My name is Mike Blyth and I was a member of the programme between 2001-2002 during my second year of studying Japanese and German at Leeds University in the UK. Being part of the YiJ Programme changed my life.

I met my best friend (and many more close friends from all over the world), I gained a second family (I still meet my YiJ host family frequently), and formed a connection with Japan, and particularly Kansai, that will continue for the rest of my life. It is in large part thanks to the programme that I was successful in securing my current job as the UK's Consul-General in Osaka.

When I look back it's hard to believe the programme was only for 9 months. I was 18 years old when I arrived in Japan and it was my first time living abroad. There were definitely difficult times as well as fun times, but through it all I felt supported and looked after by the amazing YiJ team. I am incredibly grateful for the time and effort they dedicated to teaching me Japanese, Japanese culture, and for the trips we took together to Koya-san and Kumamoto. I now know how much work looking after a group of teenagers is!

As Consul-General in Osaka my role is supporting connections between the UK and Japan. I realise more than ever how important these connections are, particularly in today's divided world. YiJ has been making these connections and giving young people the chance to experience different cultures and broaden their minds for half a century. It is a huge honour to have been a part of a programme that has changed so many lives.

So to all the staff involved in YiJ both past and present, congratulations again on reaching your 50 year milestone, thank you for everything you have done for me and all of your students, and I hope you continue changing lives long into the future.

Mike Blyth

UK Consul-General Osaka

YiJ Participant 2001-2002



コンソーシアムからのメッセージ

ハワイ大学マノア校 スタディ・アブロード・センター所長 Sarita Rai 氏

50th Anniversary: Congratulations, Sarita Rai, Director University of Hawai`i at Manoa, Study Abroad Center

Konan University, established in 1951 in Okamoto, Japan, has a long history of international collaboration. The Konan-Illinois Program (KIP) began in 1976 with the arrival of Professor David Plath from the University of Illinois, Urbana-Champaign. KIP later expanded into a four-university consortium, including the University of Arizona, Tucson, the University of Hawai'i, Mānoa, and the University of Pittsburgh, throughout the late 80s and 90s.

A key feature of the program is that students studying Japan Studies, Culture, and Japanese language primarily continue to live with host families. This arrangement reinforces classroom learning and provides a deeper knowledge and understanding while interfacing with Japanese hosts beyond public interactions.

As a member of the University of Hawai'i Consortium, I have been privileged to witness and participate in the transition from KIP to Konan International Exchange Center (KIEC). The original spirit and goals of KIP have endured. KIEC features a dynamic Global Zone designed to attract both international and local students, fostering mutual interaction and learning. Konan University's leadership, including its current Chairperson, Professor Yoshiyuki Nagasaka, has been a steadfast and supportive partner. They have demonstrated remarkable goodwill, leadership, and resilience, successfully navigating challenges such as an earthquake, tsunami, and a pandemic. Their innovative academic programming has elevated Konan University into a well-known international leader, and I am fortunate to be part of this continuing excellence. Congratulations on the 50th Anniversary. It is an achievement. This milestone is a testament to the enduring vision of the leadership and the unwavering dedication of everyone—students, faculty, staff, and host families—who have contributed to this remarkable exchange over five decades. Here's to many more years of cross-cultural discovery, academic excellence, and forging lifelong global friendships!



現役学生の声 (YIJ 2025-2026 参加学生)

Tristan McKeough さん (University of Pittsburgh)

Participating in Konan University's Year-in-Japan Program was one of the best decisions I have made in my life. From the very first day I arrived in Japan until the end, I enjoyed every second of my journey in Kobe and throughout Japan. Becoming part of a family for a year, meeting countless friends both Japanese and International, and making endless memories, I have never looked back on this decision. Among my experiences, the most memorable include traveling from Kobe north to Niigata over Winter break, seeing the first sunrise of 2026 in Okayama with my host family, visiting friends in both Tokyo and Hiroshima, among many others. Our school study trips to Koya-san and Hiroshima were also highlights both for the fun memories they provided as well as opening my eyes to Japanese culture through firsthand experience. Of course in talking about this program, one must mention the courses. My professors were all some of the best I've ever had, and my time in class was both beneficial to my learning and allowed me to bond with my classmates. Overall the YIJ program will remain for years and years one of my favorite experiences ever.



Caitlin Akemi Pope さん (University of Hawai'i at Mānoa)

My decision to participate in the Year-in-Japan Program has been life-changing. Although the challenges I have encountered while studying abroad have been significant, I believe they have only encouraged my growth. That is what I think this program is all about: growth. I originally chose to study abroad to enhance my language skills. So far, I have been satisfied with my progress toward this goal, but to my surprise, the biggest growth I've seen has been personal. My self-confidence has grown, and I have acquired valuable cross-cultural skills that will last a lifetime. This program has also taught me the importance of having a balanced life. I have always prioritized work, but experiencing life with those around me can be equally enriching. However, the most important thing I will take away from the YIJ program is learning about my own culture. I have always felt displaced from my culture as a half-Japanese person, but living with a Japanese family in a homestay and making Japanese friends at school has, above all, given me a sense of belonging.



5. 記念イベント報告

留学生同窓会の開催

2025年10月19日、Year-in-Japan Program (YiJ) の50周年を記念し、卒業生や歴代関係教職員など、多くの関係者が一堂に会する同窓会を開催した。当日は、参加者が久しぶりの再会を喜び合い、50年にわたって紡がれてきたYiJの歴史を振り返る温かな時間となった。

国際交流センター所長の松川恭子教授（文学部社会学科）と、副所長兼 Resident Director の Stephen Luft 教授（ピッツバーグ大学）による挨拶に続き、同窓生であり現在は在大阪英国総領事を務める Michael Blyth 氏（2002-2003年 YiJ 参加）によるスピーチが行われた。スピーチでは、YiJでの学びや生活がその後のキャリア形成に与えた大きな影響が語られ、参加者の共感を呼んだ。

会の後半には、本学のフラサークル *pikake* による華やかなパフォーマンスが披露され、さらにビンゴ大会や懇親会でも大いに盛り上がった。参加者からは「また集まりたい」「甲南での思い出がよみがえった」といった声が寄せられ、YiJを通じて築かれたつながりが今なお強く息づいていることが感じられた。

節目となる50周年を祝うこの同窓会は、YiJの歴史を共有し、今後のさらなる発展を願う想いを結び合わせる貴重な場となった。



6. 資料編

歴代 Resident Director 一覧

西暦	Resident Director	所属大学
1976	David W.Plath	イリノイ大学
1977	今村 茂男	ミシガン州立大学
1978	Jack G. Lewis	イリノイ大学
1979	Jack G. Lewis	イリノイ大学
1980	宗像 清彦	イリノイ大学
1981	John Singleton	ピッツバーグ大学
1982	木下 琢雄	イリノイ大学
1983	木下 琢雄	イリノイ大学
1984	木下 琢雄	イリノイ大学
1985	池田 啓子	イリノイ大学
1986	池田 啓子	イリノイ大学
1987	Robert Crawford	イリノイ大学
1988	Byung-Ho Chung	イリノイ大学
1989	Chieko Irie Mulhem	イリノイ大学
1990	Huey R. Nathan	ハワイ大学
1991	John Havens Haig	イリノイ大学
1992	John Havens Haig	イリノイ大学
1993	Chin Woo Kim	イリノイ大学
1994	Katsue Akiba Reynolds	ハワイ大学
1995	(中止)	-
1996	Harold Bush	ミシガン州立大学
1997	Joel R. Cohn	ハワイ大学
1998	Peter N.Gregory	イリノイ大学
1999	Mary Grace McDonald	ハワイ大学
2000	Kevin Doak	イリノイ大学

※氏名は本学の記録に基づいており、年度によって姓・名の順序が異なります。

西暦	Resident Director	所属大学
2001	Lucy Lower	ハワイ大学
2002	LEVIN Mark A.	ハワイ大学
2003	LEVIN Mark A. (秋) / 郡司 紀美子 (春)	ハワイ大学/イリノイ大学
2004	KIM Chin Woo	イリノイ大学
2005	VANCE Timothy J	アリゾナ大学
2006	John H.Haig	ハワイ大学
2007	奈良 博	ピッツバーグ大学
2008	HAYASHI MAKOTO	イリノイ大学
2009	JONES Kimberly Ann	アリゾナ大学
2010	PETRICE R. FLOWERS	ハワイ大学
2011	TIERNEY Robert	イリノイ大学
2012	OYLER Elizabeth	イリノイ大学
2013	唐津 麻理子	アリゾナ大学
2014	SZOSTAK John Donald	ハワイ大学
2015	LUFT Stephen David	ピッツバーグ大学
2016	RUPPERT Brian	イリノイ大学
2017	唐津 麻理子	アリゾナ大学
2018	PETRICE R. FLOWERS	ハワイ大学
2019	OSHITA Linda	ハワイ大学
2020	(中止)	-
2021	(中止) *春は不在	-
2022	CALLAHAN Christopher Thane	イリノイ大学
2023	JONES Kimberly Ann	アリゾナ大学
2024	長谷川敦志	ハワイ大学
2025	LUFT Stephen David	ピッツバーグ大学

※氏名は本学の記録に基づいており、年度によって姓・名の順序が異なります。

歴代国際交流センター所長・副所長一覧

西暦	所長氏名(所属)	副所長氏名(所属)
1990	光岡 貞夫 (経営学部)	丸田 隆 (法学部)
1991	光岡 貞夫 (経営学部)	丸田 隆 (法学部)
1992	光岡 貞夫 (経営学部)	丸田 隆 (法学部) 大森 義彦 (文学部)
1993	河田 潤一 (法学部)	大森 義彦 (文学部) 丸田 隆 (法学部) 久後 行平 (理学部)
1994	河田 潤一 (法学部)	大森 義彦 (文学部) 久後 行平 (理学部)
1995	丸田 隆 (法学部)	大森 義彦 (文学部) 久後 行平 (理学部)
1996	上村 邦子 (文学部)	大森 義彦 (文学部) RYCROFT David W (文学部)
1997	上村 邦子 (文学部)	RYCROFT David W (文学部)
1998	上村 邦子 (文学部)	RYCROFT David W (文学部) 上 埜 進 (会計大学院)
1999	大森 義彦 (文学部)	西村 順二 (経営学部)
2000	大森 義彦 (文学部)	西村 順二 (経営学部)
2001	西村 順二 (経営学部)	中井 伊都子 (法学部)
2002	松本 茂樹 (理工学部)	中井 伊都子 (法学部)
2003	松本 茂樹 (理工学部)	中井 伊都子 (法学部)
2004	上村 邦子 (文学部)	藤原 三枝子 (国際言語文化センター)
2005	上村 邦子 (文学部)	藤原 三枝子 (国際言語文化センター)
2006	上村 邦子 (文学部)	藤原 三枝子 (国際言語文化センター)
2007	上村 邦子 (文学部)	津田 信男 (国際言語文化センター)
2008	津田 信男 (国際言語文化センター)	杉田 俊明 (経営学部)
2009	津田 信男 (国際言語文化センター)	杉田 俊明 (経営学部)
2010	長坂 悦敬 (経営学部)	金 ムンスク (法学部)

西暦	所長氏名（所属）	副所長氏名（所属）
2011	長 坂 悦 敬（経営学部）	金 ムスク（法学部）
2012	中 谷 健太郎（文学部）	小 西 幸 男（国際交流センター）
2013	中 谷 健太郎（文学部）	小 西 幸 男（国際交流センター）
2014	中 谷 健太郎（文学部）	小 西 幸 男（国際交流センター）
2015	伊 庭 緑（国際言語文化センター） 岡 田 元 浩（経済学部）	小 西 幸 男（国際交流センター） 中 畠 孝 幸（文学部）
2016	岡 田 元 浩（経済学部）	中 畠 孝 幸（文学部）
2017	中 谷 健太郎（文学部）	中 畠 孝 幸（文学部）
2018	中 谷 健太郎（文学部）	松 川 恭 子（文学部）
2019	中 谷 健太郎（文学部）	金 ムスク（法学部）
2020	中 谷 健太郎（文学部）	金 ムスク（法学部）
2021	松 川 恭 子（文学部）	中川 真太郎（経済学部）
2022	松 川 恭 子（文学部）	中川 真太郎（経済学部）
2023	松 川 恭 子（文学部）	中川 真太郎（経済学部）
2024	松 川 恭 子（文学部）	中川 真太郎（経済学部）
2025	松 川 恭 子（文学部）	中川 真太郎（経済学部）

同窓生統計

1976年から2025年までの間に、1,676名の留学生を甲南大学で受け入れた。

西暦	学生数
1976	21
1977	21
1978	14
1979	13
1980	20
1981	33
1982	33
1983	32
1984	29
1985	23
1986	26
1987	12
1988	31
1989	33
1990	31
1991	32
1992	41
1993	48
1994	38
1995	0
1996	32
1997	43
1998	38
1999	32
2000	36

西暦	学生数
2001	43
2002	36
2003	42
2004	47
2005	33
2006	35
2007	44
2008	51
2009	43
2010	47
2011	33
2012	55
2013	33
2014	45
2015	41
2016	37
2017	33
2018	46
2019	32
2020	0
2021	2
2022	47
2023	36
2024	51
2025	52
合計	1,676

参考資料

Year-in-Japan Program の創設に携わった故 David W. Plath 博士（1930～2022，イリノイ大学名誉教授，東アジア研究，映像人類学）のプログラムと日本との関わりについては、本学の西川麦子名誉教授が以下の論文 2 点と、西川名誉教授がホストを務める米国イリノイ州 Urbana 市のコミュニティラジオ局 WRFU の日本語プログラム、Harukana Show の関連回の記録に詳しく記載されている。

西川麦子, 2024, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト—グローバルなメディア実践とマルチ・ローカルな協働—」『甲南大學紀要. 文学編』174: 89-106.

<https://konan-u.repo.nii.ac.jp/records/2000172>

西川麦子, 2025, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」(2)多様なアクターとつむぐ物語』『甲南大學紀要. 文学編』175: 125-140.

<https://konan-u.repo.nii.ac.jp/records/2000689>

■ Harukana Show David Plath 博士関連回リスト

No.553-2, Oct.29, 2021, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 1 話—with D. Plath & 柳沢健

<https://harukanashow.org/archives/17699>

No.554-2, Nov.5, 2021, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 2 話—Illinois&Nagano with D. Plath & 柳沢健 & 朝日美術館

<https://harukanashow.org/archives/17762>

No.577, April 15, 2022, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 3 話—海を渡った父の絵と朝日美術館で対面

<https://harukanashow.org/archives/18887>

No.607, Nov. 11, 2022, David Plath, 'So Long Asleep', つながりをつなぐ

<https://harukanashow.org/archives/20076>

No.625, March 17, 2023, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 4 話—60 年前の柳沢健さんの Scrap Book と D. Plath さんからの航空便

<https://harukanashow.org/archives/20669>

No. 659, Nov. 10, 2023, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 5 話—伊勢志摩の調査：Plath さんと Morita さんと Kohara さん

<https://harukanashow.org/archives/21932>

No. 686-2, May 17, 2024, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 6 話—柳沢健の展覧会と David Plath との出会いの足跡

<https://harukanashow.org/archives/22743>

No. 692, June 28, 2024「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 7 話—呼応する声 with SKU & 朝日美術館

<https://harukanashow.org/archives/22904>

No. 710, Nov. 1, 2024, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 8 話—世界をつなぐ Plath さんの夢

<https://harukanashow.org/archives/23592>

No. 717, Dec. 20, 2024, 「時間と場所をこえて記録をつなぐプロジェクト」第 9 話—ジョン・ビヨンホさんのことば 1988-1989

<https://harukanashow.org/archives/23864>

■その他

- ・「Hitch your wagon to a star 1976～77 甲南－イリノイプログラム報告白書」(甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star Vol,2 1977～78 甲南－イリノイプログラム報告白書」(甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star Vol,4 1978～79 甲南－イリノイプログラム報告白書」(甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star Vol,6 1979～80 甲南－イリノイプログラム報告白書」(甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star Vol,8 1980～81 甲南－イリノイプログラム報告白書」(甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1981～82 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1982年7月15日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1982～83 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1983年12月1日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1983～84 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1985年6月1日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1984～85 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1986年6月26日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1985～86 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1987年9月10日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「Hitch your wagon to a star 1986～87 甲南－イリノイプログラム報告白書」
(1988年3月25日、甲南大学調査広報室発行)
- ・「甲南・イリノイセンター YEAR IN JAPAN PROGRAM」
(1983年12月1日、甲南・イリノイセンター、甲南大学調査広報室発行)
- ・「甲南学園の100年」(2020年9月30日、学校法人甲南学園発行)

Year-in-Japan Program50 周年記念誌

2026 年 3 月発行

発行・編集 甲南大学国際交流センター
松川恭子、中川真太郎、小幡真史
神戸市東灘区岡本 8-9-1